額の違いが物語の解釈に与える影響

――中等教育物語教材「夏の葬列」「清兵衛と瓢箪」の分析を通して――

水野　稚菜

1　本稿の目的

初等教育、中等教育の国語科で扱う文学教材の中には、額縁構造をもつ作品群が存在する。この額縁構造をもつ文章は主に三部から構成され、それらを二つの額縁部と一つの絵画部で分けることができる。甲斐（1989）が「第一部『現在の世界』、第二部『回想の世界』、第三部『現在の世界』」としていることから、額縁構造では現在時制が額縁、間に挟まれた過去時制は絵画となる。このとき、第一部にあたる額縁を「前額」、第三部にあたる額縁を「後額」と文章全体の構成上、そう呼称しよう。また、倉井（2018）は「『額縁構造』をもった物語教材において、『変容』が書かれている『現在』部分に重きが置かれている」と考察しており、絵画部分については「『変容』と関係のある出来事、つまり『原因』や『きっかけ』となる出来事が書かれている」と述べている。このことから、前額から後額にかけて「大きな変容」が描かれており、変容の原因やきっかけは絵画に描かれる関係性が額縁構造に存在すると考えられる。

ところで、稿者は初等教育・中等教育の額縁構造をもつ文学教材の授業化に向けて精緻な作品研究を行う中で、まだ明らかにされていない額縁構造特有のポイントがあるのではないかという問題意識を持つようになった。須田（2020）は「作品構造の把握と詳細な読解の2つを可能にするためには、物語の終末部の特徴を捉えた上で、終末部で描かれる急展開と大きな変容がいかにして生み出されるのかといった要因や仕組みを、作品の構造、形象の両面から解明することが求められる」と述べている。このことから、額縁構造がもつ特有のポイントを明らかにすることは詳細な読解を行う上で有用であるといえよう。

前年度では、額縁構造を持つ小学校物語教材に限定し、実際に作品を用いて検討を行うことで、初等教育で用いられる物語教材にある額縁構造特有のポイントを明らかにした。ひとつは、絵画部分に読み手が作品の行く末に対して疑問を持つ仕掛けがあり、後額で解消される謎解きの要素である。もうひとつは、絵画から後額にかけてマイナスからプラスもしくはプラスからマイナスの印象へと大きく転調する要素である。これらの要素は、後額が重要であるため「後額が存在しない片額構造」（以下前額構造）には当てはまらない。そのため、前額構造以外の狭義の額縁構造の条件である。これは、額縁構造の内容的な特徴についての読み取りに役立ち、読み深めの手立てとなるため、授業化の手立てとして、活用できると考えられる。

一方、本稿では、実際に額縁構造を持つ中等教育で用いられる物語教材に限定して分析することで、その特有のポイントが何であるかを明らかにしていきたい。また、小学校から中学校、高等学校にかけてのつながりを意識した額縁構造をもつ文学教材を扱う授業を構成する上で、どのような作品読解の視点が有効に機能するかを具体的な作品内容に寄りつつ考察することが本稿の直接の目的である。

2　額縁構造の特徴

額縁構造は三部構造をとり、第一部を「前額」、第二部を「絵画」、第三部を「後額」と称する。額縁構造について安藤（2015）は「一般に時制が、『現在』で進行しているが、途中で『過去』に遡り、また『現在』に戻ってくる構成を指す。」としている。時制的に額縁構造を捉えると、「前額」「後額」といった額縁部分をなす「現在」と、その額縁の中に飾られる絵画部分をなす「過去」へ反復するという時制が限定された構造になっている。加えて、構造上の特徴だけでなく、額縁部分である「前額」と「後額」、「絵画」のそれぞれに書かれた内容についても特徴がある。須貝（2001）は「『額縁構造』というならば、その最初の一文と最後の一文の対応には、非対称の関係を見出すことができ」としている。このことから、最初の一文がある「前額」と最後の一文がある「後額」では、須貝（2001）が非対称の関係と称するような「大きな変容」が存在するといえる。須田（2020）は「物語の中で描かれる変容とその因果関係を詳細に読み解くためには、作品の形象面にも着目し、そこに施された『落差』の要因を解明することが不可欠である」とし、この「落差」を感じさせる要因となるものについて「物語の展開部に仕組まれた『仕掛け』と『伏線』である」と述べている。以下に「仕掛け」と「伏線」について整理する（須田 2020）。

仕掛け……物語の文章上に顕在化しており、読者の予想を結末とは異なる方向へ誘う逆説の働きをもつ

伏　線……物語の結末に直接作用する働きをもち、読者に気付かれないように物語中に潜在化した形で仕組まれている

加えて、この「伏線」や「仕掛け」といった要因の所在について須田（2020）は「終末部に至るまでの展開部にも存在するはずである」と述べている。額縁構造における過去時制の「絵画」は終末部に至るまでの展開部といえるため、「仕掛け」や「伏線」といった要因が描かれているといえる。したがって、「前額」から「後額」にかけて起こる「大きな変容」と過去時制の「絵画」には直接的な因果関係を見出すことができ、「絵画」には「変容」に対する説明的機能をもつ「きっかけ・原因」といえる要因が存在する。

また、甲斐（1989）は額縁構造について「三部構成の物語で説明すると、第一部と第三部の物語が外枠としての額縁をなし、第二部がうち絵に該当するからである」と述べている。そのため、額縁構造はかならずしも三部構造をとるわけではない。先に述べたように、「現在」と「過去」とが反復した時制の流れ

になっていればよいため、「現在―過去」または「過去―現在」と額縁のうち、「前額」もしくは「後額」が欠けている額縁構造が存在する。このように額縁のうちどちらかが欠けているものを「片額構造」、両方ともそろっているものを「両額構造」と呼ぶ。倉井（2018）は、その額縁構造の類型について述べている。以下は倉井(2018)の類型を整理したものである。（水野，2023）

「両額構造」…両方の額縁部分が存在し、「前額―絵画―後額」という最もオーソドックスな型である。両方の額縁部分が書かれているため、変容の前後を比較しやすい。

「前　型」……「前額―絵画」となっており、後額が欠けている。「変容前」や「きっかけ・原因」から「変容後」を考える必要がある。教材の読み取りが十分におこなえないと多様な解釈が生まれやすく、「両額構造」にくらべ難しい教材である。

「後　型」……「絵画―後額」となっており、前額が欠けている。「変容前」がなく、「絵画」に書かれている「きっかけ・原因」から「変容」を考えなければならない。「後額」について十分な読み取りが行えないと「変容」そのものに気づかない可能性があり、とても難しい教材である。

整理された類型から、「両額構造」よりも「片額構造」の方が教材として扱うことが難しくなることがわかる。

読み取りにあたり、額縁構造では「情報量」と「出来事の時間の変化」が重要な要素であることが指摘されている（倉井,2018）。情報量とは額縁部分に描かれた文章量である。「前額」と「後額」にある非対称の関係が「大きな変容」といえるため、情報量の多さは「変容」の明確さに直結する。一方で「出来事の時間の変化」とは、「額縁」と「絵画」の間の時制の変化の明確さである。時制の変化が不明瞭であると額縁構造とは別の他の構造なども考慮して読解をしなければならない。そのため「情報量」と「出来事の時間の変化」という要素が物語教材の中に含まれているかによって、教材の読み深めの難易度や特徴が変化する。

図1に額縁構造について以下のように図式化する。

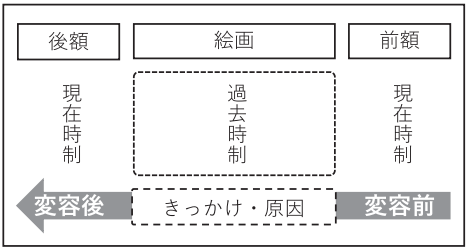

図１　額縁構造

３　分析作品の梗概

３・１　「夏の葬列」

本教材は、「彼」と表記された人物が主人公である。彼は、

疎開児童として三か月ほど住んでいた海岸の小さな町に、「ヒロ子さん」という女の子を殺してしまったかもしれないという疑念と罪悪感を払しょくするべく降り立つ。

十数年前、彼は同じく疎開児童である真っ白なワンピースを着たヒロ子さんと芋畑の向こうで動く一列になった小さな人影を眺めていた。ヒロ子さんは彼よりも二年上級の五年生で勉強も良くでき、大柄でいつも弱虫の彼をかばい、常にそばにいた。ヒロ子さんは彼にその小さな人影の正体は葬列であること、子どもが葬列に参加するとおまんじゅうをもらえることを教えてくれる。彼とヒロ子さんはおまんじゅうをもらうべく、その葬列に向かって競争する。その時、正面の丘の陰から艦載機が現れ、芋畑の中に倒れこんだ彼の頭上ですさまじい炸裂音が鳴り響く。彼は「白い服は格好の目標になる」という男の声を聞き、白い服を着たヒロ子さんは撃たれて死んでしまうと考える。恐怖の中、動けないでいる彼のもとに道の防空壕へ一緒に避難するべくヒロ子さんは助けに来るが、真っ白な服が目に入った彼はこのまま目立つことで艦載機の格好の目標となりヒロ子さんと一緒に殺されてしまうと感じる。そして彼はヒロ子さんを突き飛ばす。その時、彼は強烈な衝撃と轟音が地べたをたたきつけヒロ子さんがゴムまりのように弾んで空中に浮くのを目撃する。重症で運ばれたヒロ子さんのその後を聞かないまま彼は町を去る。

再び町へと戻ってきた彼は、一列になって動く喪服を着た人々の小さな葬列を目にする。そして葬列の中央に写真が置かれた棺を見つけ、その写真から昔の面影を持ちながら三十歳近くになったヒロ子さんの姿を感じる。彼は奇妙な喜びで胸が絞られるような感覚になり、自身が人殺しではなかったことに安堵する。葬列に参加する子どもの一人から、亡くなった女性の「体は全然丈夫であった」ことを聞き、突き飛ばしたことで打ち抜かれた太ももは治り、自身の罪悪感が完全に払しょくされたと感じる。有頂天になった彼は再び子供に死因について質問し、女性の死因が自殺であること、娘を戦争で亡くし気が違ってしまっていたこと、写真とは異なりおばあさんと呼ばれるような年であったことを知る。彼は、葬列はヒロ子さん自身ではなくヒロ子さんの母親のもであり、母親が自殺する原因となったのは自身がヒロ子さんを突き飛ばし殺してしまったことであると確信する。そして、彼は二人の命を結果的に奪ってしまった罪悪感をこの先も永遠に持ち続けていくことになり、逃げ場などないという意識を持ち、足取りを確実なものにする。

3．2　「清兵衛と瓢箪」

本教材は、清兵衛という子どもと瓢箪の話である。主人公である清兵衛は、現在、絵を描くことに熱中している。それより以前は瓢箪に熱中していたが、ある出来事によって清兵衛と瓢箪の縁が切れてしまう。

清兵衛の凝り性は烈しく、皮付きの瓢箪を買ってきては自身で口を切り種を出し栓を作り、茶渋で臭みを抜くと貯えておいた父の飲みあました酒を使いしきりに瓢箪を磨いていた。また、日がな一日瓢箪のことを考え、爺さんのはげ頭を瓢箪と勘違いして眺めたり、町にある瓢箪を下げた店といえば必ずその前に

立って眺めたりしていた。
　清兵衛は十二歳でまだ小学校に通っており、他の子どもとは遊ばずに昼は一人で町へ瓢箪を見に出かけ夜は瓢箪の手入れをしていた。清兵衛は古瓢にはあまり興味を持たず、口を切ってもいないような皮付きの瓢箪、特に平凡な瓢箪形をした格好のもに興味を持った。
　清兵衛の父はそんな清兵衛を見て「子どものくせに瓢などいじりなぞしおって……。」と苦々しく思っていた。それは父が客である男と品評会へ出ていた馬琴の瓢について話していた際、「あの瓢はわしにはおもしろうなかった。」と口をはさんだ清兵衛に対し目を丸くして怒るほどだった。
　ある日、清兵衛は震いつきたいほどにいい瓢箪を見つけ、その瓢箪を十銭で買った。それ以来、その瓢箪が離せなくなり、学校にも持っていくようになった。しまいには時間中にも瓢箪を磨いていたが、修身の時間中に受け持ちの教員に見つかり取り上げられてしまう。教員は声を震わせて怒り「将来見込みのない奴だ」と言い、この出来事を清兵衛の父に伝えるべく清兵衛の家まで訪ね、清兵衛の母に食ってかかった。清兵衛の父はその話を聞くと清兵衛をさんざんに殴りつけ、「将来見込みのない奴だ」と言って玄能で清兵衛の瓢箪を全て割ってしまう。清兵衛はただ青くなって黙っていた。
　教員は清兵衛から取り上げた瓢箪をけがれた物ででもあるかのように、捨てるように年寄った学校の小間使いにやってしまう。二か月後、金に困った小間使いはその瓢箪を近所の骨董屋へ持っていき、もともと十銭だった瓢箪は五十円で売れる。小間使いはそのことを誰にも言わなかったため、ついぞその瓢箪の行方は誰も知る者がいなかった。そして、骨董屋もまたその瓢箪を地方の豪家に六百円で売りつけた。
　清兵衛は現在、絵を描くことに熱中しており、その時には瓢箪を取り上げた教員や割ってしまった父を怨む心はなかった。しかし、清兵衛の父はそろそろ絵を描くことにも叱言を言い出してくる。

4　「夏の葬列」：両額構造

4．1　内容的特徴

　夏の葬列は三部構成である。第一部で彼は疎開児童として三か月ほど住んでいた海岸の小さな町に十数年ぶりに降り立った。そして、広い芋畑の向こうに葬列が動いているのを見たとき彼は再び「あの時」の中にいるような錯覚に陥る。第二部では、「あの時」の詳しい内容について描写されている。彼は、同じ疎開児童のヒロ子さんを突き飛ばし、ヒロ子さんは艦載機に撃たれてしまう。第三部では、彼は「あの時」のことを思い出すと共にヒロ子さんの安否を聞かないままこの町を去ったことを改めて意識する。そして、芋畑の向こうの葬列の遺影にヒロ子さんの面影を見る。しかし、それはヒロ子さんの葬列ではなくヒロ子さんの母の葬列であり、その死の原因がヒロ子さんの死であることを知る。彼はヒロ子さんだけでなくヒロ子さんの母の死もまた自らの行動が引き金となったことを知る。
　第三部の最終段落において次のような文がある。

もはや逃げ場はないのだという意識が、彼の足取りをひどく確実なものにしていた。

ヒロ子さんとその母親の死の原因が自らの行動に起因することを知り、逃げ場などないことを知った彼は死の責任について意識する。しかし、第一部の時点において彼は死の責任について意識しきれていないと考えられる。第三部の冒頭にて彼はヒロ子さんを銃撃の下に突き飛ばしたことについて「殺人を犯した」と称しているが、第三部の終盤では彼が町に降り立った理由は「過去を封印して自身の身を軽くするためだけ」とある。つまり、彼は殺人を犯したと考えてはいるが、そうではないかもしれないという希望を捨てられずにいる。これは、彼が撃たれたヒロ子さんのその後を聞かずに町を去ったからこそ、死の責任が自身にあるという結果を確定しきれていないためである。加えて、ヒロ子さんの死の「きっかけ・原因」も大きく関わっている。第二部で「白い服は絶好の目標になる」という男の言葉を聞いたため、彼は助けに来たヒロ子さんを銃撃の下へ突き飛ばしてしまった。この描写は直接的な「殺人」の「きっかけ・原因」であることを示すほかに、彼の殺人が故意のものではなく恐怖にかられた末にヒロ子さんのワンピースの白が目に入ってしまったことで反射的に起きたということを物語っている。これもまた、「わざとではないためしかたなかった」というようにヒロ子さんの死の責任を意識しにくくしていた原因といえる。つまり、誰の葬列か知る前の第一部の時点では、彼は死の責任が自身にあるということを認めきれていないといえる。そのため、「夏の葬列」においての「変容」とは、「彼の罪の意識」の有無である。

夏の葬列には「きっかけ・原因」以外にも「変容」を意識させるため、読み手を結末とは異なる方向へ誘う「仕掛け」や結末を潜在的に示す「伏線」が存在する。例えば、回想の中のヒロ子さんの性格や体格、年齢といった描写が仕掛けになってる。彼がヒロ子さんについて細かく覚えていることから、彼女の面影のある遺影の写真から葬式の対象がヒロ子さんであるという彼の考えに説得力が増す。伏線には、ヒロ子さんは葬列でおまんじゅうがもらえることを母から教えてもらったというセリフがある。このセリフにヒロ子さんの母親の存在が示唆されており、本当の葬列の対象の存在を示している。加えて、「銃撃されたヒロ子さんがゴムまりのように弾んだ」という描写は、ヒロ子さんが助からないと思えるほどのすさまじい銃撃にあったことを感じさせ、ヒロ子さんの死を予見させる伏線となっている。そして、これらの「仕掛け」や「伏線」は物語の終末にあるどんでん返しに収束する。葬列がヒロ子さんのものであり彼女の死の責任から逃れられると感じた彼から一度罪の意識が消え、彼だけでなく読み手の気

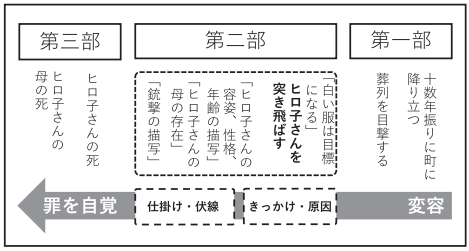

図２　夏の葬列の内容的特徴

も緩む。直後、やはりヒロ子さんは銃撃によって死に、伏線として存在を描写されていた彼女の母親の葬列であったことを知る。このとき、彼が担う死の責任は二つに増え、罪の意識はより重く今まで以上に彼にのしかかる。このどんでん返しの落差によって、読み手は衝撃を覚え、彼の罪の意識の変化を鮮明に感じ、物語上の変容を読み取ることにつながる。以下、図2に夏の葬列の内容的特徴についてまとめる。

4．2　額縁構造として捉えた夏の葬列

夏の葬列を時系列で捉えたとき、「現在―過去―現在」となる。まず、サラリーマンになった彼がその町の駅に降り立ってから、芋畑の向こうの葬列を見て呼吸をすることも忘れて「あの時」を思い出すまでの現在時制が「前額」にあたる。次に疎開児童であった彼とヒロ子さんの出来事が描写され、ヒロ子さんが銃撃にあうまでが過去時制の「絵画」部分である。最後に、再びサラリーマンの彼に時制が戻り、物語が終幕するまでの現在時制が「後額」になる。「前額」と「後額」が存在し「変容前」と「変容後」が示されていることから、それらを比較することで対照的な「変容」である「彼の罪の意識の有無」を読み取ることができる。加えて、夏の葬列の額縁部分は絵画部分に比べても描写が多く情報量があるため、変容を推測しやすい。絵画部分には、変容の「きっかけ・原因」となる彼の過去が述べられている。したがって、夏の葬列は「前額―絵画―後額」の両額構造と呼ばれる額縁構造をもった物語教材である。以下の図3に、夏の葬列の額縁構造を示す。

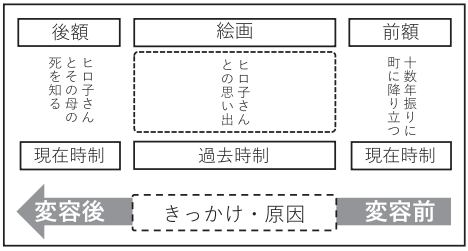

図3　夏の葬列の両額構造

5　「清兵衛と瓢箪」：両額構造

5．1　内容的特徴

清兵衛と瓢箪は三部構成の作品である。第一部には、この作品が清兵衛という子どもと瓢箪とのある出来事の話であり、その出来事以来、清兵衛と瓢箪との縁は切れてしまったとある。そして、清兵衛が瓢箪に熱中したように絵を描くことに熱中しているという現在の姿が述べられている。第二部では、子どもの清兵衛がどれほど瓢箪に熱中していたのかや、その熱中によってどうして瓢箪との縁が切れてしまったのかという出来事が述べられている。加えて、清兵衛が十銭で購入した瓢箪が、清兵衛が磨くことを通して六百円で地方の豪家に売られるという内容もある。第三部では、再び清兵衛が絵を描くことに熱中していること、熱中することを見つけた時点で清兵衛は瓢箪と縁が切れるきっかけとなった父親や教師を怨んでいないことが述べられている。加えて、絵を描くことにも父親が叱言を言い出してきたことも描写されている。

第一部では、清兵衛と瓢箪との縁が切れたことを示唆しながらも、現在、絵に夢中であることが述べられている。そして、

第三部には、父親が絵を描くことに対して叱言を述べてきている描写で終わっている。これらのことから、清兵衛は瓢箪との縁が切れたように絵を描くこととも縁が切れてしまうと読み取れる。しかし、その前の文に以下のような清兵衛の性格を示唆する描写がある。

……清兵衛は今、絵を描くことに熱中している。これができた時に彼にはもう教員を怨む心も、十あまりの愛瓢を玄能で割ってしまった父を怨む心もなくなっていた。

第二部には、清兵衛が四六時中瓢箪のことを考え、婆さんから十銭で瓢箪を買った際にどれほど興奮していたのかなど瓢箪への熱中具合が描かれている。これほど瓢箪に愛をかけていたにもかかわらず、それを奪い、割った相手である教員や父親を怨んでいない。したがって、清兵衛は物事を引きずらず、流すことができる性格であるとわかる。そして、「これができた時に」とあることから、流すことができるのは過去（瓢箪に熱中していたとき）に比べ、現在（絵に夢中になっているとき）の方が充実しているからこそ流すことができる。つまり、清兵衛は、ただ夢中になるものを変えているのではなく、脱皮して一回りも大きくなるように技量を上げているといえる。また、第二部に清兵衛の十銭で購入し必死に磨いた瓢箪に六百円の価値が付けられており、清兵衛の審美眼が素晴らしいものであることが証明されている。脱皮していることから、現在ではこの審美眼も過去以上に磨かれているといえる。したがって、清兵衛と瓢箪は、悲劇の物語から清兵衛が大成していく上昇の物語へと変容していると解釈できる。

変容の「きっかけ・原因」は、第二部にある清兵衛と瓢箪の縁を切った教員と父親の行動と、清兵衛がもつ審美眼の証明となる六百円になった瓢箪の出来事である。教員と父親の仕打ちは清兵衛の流せる性格を引き立たせ、審美眼は清兵衛の素晴らしい才能を裏付ける。そのため、絵をたとえ取り上げられても清兵衛はまた新しいことに熱中し自身の技量を上げて脱皮し続ける上昇の物語に物語を変容させる「原因・きっかけ」であるといえる。一見するとこれらの「きっかけ・原因」は父親に熱中しているものと縁を切られてしまうという悲劇性を助長させるように感じられる。しかし、実際は悲劇性ではなく、清兵衛の大成していく未来を示唆する役割を担っていると考えられる。

以下の図4に清兵衛と瓢箪の内容的特徴について示す。

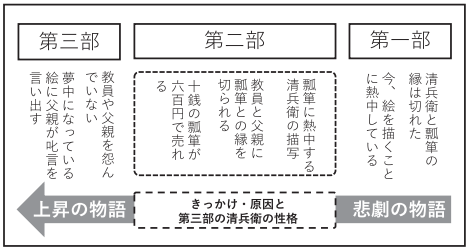

図4　清兵衛と瓢箪の内容的特徴

5．2　額縁構造として捉えた清兵衛と瓢箪

清兵衛と瓢箪を時系列で捉えたとき、「現在―過去―現在」となる。まず、冒頭から現在、清兵衛が絵を描くことに熱中し

ていると述べられている部分までは「現在時制」であるため、「前額」にあたる。次に、清兵衛と瓢箪の縁が切れる出来事が述べられている部分は、清兵衛の子供の時の話であるため、「過去時制」の「絵画」部分である。最後に、再び現在、絵を描くことに熱中しているという描写の部分から物語の最後までが「現在時制」の「後額」になる。額縁構造は前額と後額が存在し「変容前」と「変容後」が示されており、それらを比較することで対照的な「変容」を読み取ることができる。しかし、清兵衛と瓢箪は額縁部分の描写は三文ずつしかなく情報量が少ないという特徴を持つため、対照的な変容を推測しにくいといえる。一見すると、清兵衛が絵を取り上げられるという悲劇的な変容のように感じられるが、絵画部分にある変容の「きっかけ・原因」と後額の描写を加味することで、悲劇と思われた物語が大成していく上昇的な物語であったという対照的な変容を新たに解釈することができる。

したがって、清兵衛と瓢箪は「前額―絵画―後額」の両額構造と呼ばれる額縁構造をもった物語教材である。以下の図5に、清兵衛と瓢箪の額縁構造を示す。

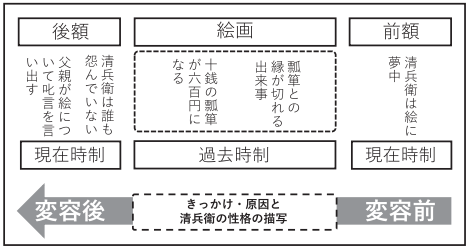

図5　清兵衛と瓢箪の両額構造

6　考察

本研究は、中等教育で用いられる額縁構造の物語教材がもつ特有のポイントを、授業構成上、どのように作品読解へ生かすことができるかを目的としている。それにあたり、中等教育で用いられる「夏の葬列」と「清兵衛と瓢箪」から額縁構造の特有のポイントを整理し、そのポイントを活かした物語の解釈の余地について考察する。

額縁構造をもつ物語の解釈において、前額と後額にかけて起きる対照的な変容の読み取りが重要である。変容の読み取りについて、倉井（2018）が整理した類型では、両額構造よりも前型・後型といった片額構造の方が変容を見つけにくいとされている。また、額縁部分に描かれた文章量である「情報量」は変容の読み取りにあたり重要であるとしている（倉井 2018）。これらは、前額に描かれている内容と後額の内容との比較ができない、もしくは情報量の少なさから難しくなり、変容が見つけにくいためである。

例として、水野（2023）で取り上げた「世界一美しいぼくの村」は前額がない後額のみの片額構造である。前額と後額との内容の比較ができないため、変容は両額構造の額縁構造に比べわかりにくい。加えて、後額は「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。」という一文のみで、情報量が非常に少ない。額縁構造において存在する変容を読み取るにあたり、額縁部分の変容は前額と後額で対称的な内容となることから後額の「村がなくなった」は「村があった」の変容後だと考えられる。また、絵画部分の冒頭では主人公のヤモが暮らしている美

しい国や村が描かれている。それ以降では、にぎわう街の描写や初めて果物を売ることに挑戦するヤモの姿、その儲けによって羊を買い父と共に「世界一美しいぼくの村」に戻り、兄の帰りを待つという描写がされている。これらの絵画部分の描写は読み手にプラスの印象を与える。その一方で、絵画部分には戦争へ行ってしまった兄のことや戦争で足をなくした男、南の方で戦争が激化している描写が所々に存在し、読み手は物語の展開に戦争の激化という不安感を覚える。しかし、絵画がプラスな印象で締めくくられることから、読み手は不安感から解放され気が緩む。気が緩む分、直後の後額の「戦争によって村がなくなる」という描写は読み手に大きな落差を感じさせ、物語の悲劇性を助長する。つまり、「村がなくなった」という悲劇を読み手が感じるのは、幸せなヤモの一日がきっかけであり、戦争が原因である。そのため、後額の「村がなくなる」という描写は、額縁構造のもつ特徴である対照的な変容そのものを指すといえる。したがって、片額構造であり後額の情報量は少ないにも関わらず「世界一美しいぼくの村」は額縁部分から変容を推測しやすい。そして、絵画部分がその変容の「きっかけ・原因」を表しているため、変容が読み取りやすくなっている。

一方で、「清兵衛と瓢箪」は両額構造の物語教材である。「世界一美しいぼくの村」と同様に額縁部分の描写が前額と後額ともに三文ずつしかなく情報量が少ない。前額と後額の内容を比較したとき、どちらも清兵衛の興味が瓢箪から絵に移っていることが述べられている。加えて、前額では瓢箪との縁が切れたこと、後額では父親から絵について叱言を言われることが述べられている。これらの額縁の描写から、読み手は「今後、清兵衛が絵を描くことをやめさせられる」と想像する。加えて、絵画部分では清兵衛と瓢箪の縁が切れる出来事について描写されており、変容の「きっかけ・原因」が描写されていると考えられる。しかし、額縁構造の特徴である変容とは対照的なものとなるため、前額部分で描写された出来事である瓢箪との縁が切れることの繰り返しである「絵との関係が切れる」は対照的な変容になっているとはいえない。このような場合、新たな変容の検討をどのように行うべきだろうか。

まず、中等教育の額縁構造をもつ物語教材のひとつである「夏の葬列」の先行研究と内容的特徴から、変容について新たな解釈の余地を検討する。

「夏の葬列」は両額構造であり、情報量も十分な物語教材である。そのため、額縁部分から変容が掴みやすい。額縁部分から、彼は「ヒロ子さんの死に関与していない」ことを確信することで自身の罪悪感を払しょくすることを目的に、十数年ぶりに疎開先の町へ訪れたことがわかる。彼はヒロ子さんが艦載機に撃たれてからどうなったのかを知らないままに町を後にしている。そのため、前額部分の時点で彼はヒロ子さんの死の原因の所在を持て余し、自身が死の原因であると考えているが確信が持てない状況にある。後額で、葬列により彼はヒロ子さんの死の原因が自身の行動であることを自覚する。加えて、その行動によってヒロ子さんの母親の死の間接的な原因になっていることも知ることとなる。真実を知ることで彼は罪を自覚し、彼の罪悪感は確実なものとなる。したがって、夏の葬列の変容と

は彼の罪の意識である。絵画部分で艦載機が現れた際に「白い服は格好の標的になる」という発言がある。発言した男は艦載機の標的とならないようヒロ子さんを案じてのものだったと考えられる。しかし、その発言は「目にはヒロ子さんの服の白さだけが鮮やかに映っていた」とあるように彼の印象に強く残り、恐怖を感じていた幼い彼はヒロ子さんを突き飛ばすという行動を起こしてしまう。これについて、山本（2018）は「初読の段階ではおそらく善意の意味しかないと思われた言葉が、結末を知ってもう一度読み返すと、『悲劇を生み出した要因』という意味を含んでいることに読み手は気づくだろう。」と述べている。したがって、良かれと思った善意がヒロ子さんの死を引き起こし、彼が罪を犯す原因につながるため、悲劇性が助長される。加えて、夏の葬列において西原（2002）が「『彼』の誤解が大きければ大きいほど末尾の逆転劇は生きる」と述べていることから、夏の葬列は結末に大きな落差のある構造をもつ物語である。「彼の誤解」とは、ヒロ子さんの母の葬列をヒロ子さんのものと勘違いしたことで生まれた「自分はヒロ子さんの死の原因ではなかった」という彼にとっての希望である。そして、「彼の誤解」は作者による「巧妙な仕掛け」と途中に張り巡らされた「伏線」によってつくられている（西原，2002）。そのため、「彼の誤解」を作り出す「仕掛け」や「伏線」は「ヒロ子さんやヒロ子さんの母の死の原因は自分だった」という結末のどんでん返しへと鮮やかにつながり、夏の葬列で読み手が感じる悲劇性を強める。また、結末に大きな落差がある物語構造について、須田（2019）は「悲劇の最も重要な構成要素は物語の筋であり、その筋が逆転と認知によって驚きを伴う形で転換されたときに、観客や読者に大きな憐みや恐れがもたらされる」としている。変容とは前額と後額にある対照的な内容であるため、筋が逆転することで読み手が結末に悲劇を大きく感じる夏の葬列の結末こそが冒頭と対照的な内容であり、変容後の姿であることを表している。したがって、夏の葬列の作品読解において、額縁部分や絵画部分にある登場人物の「善意の言葉」「仕掛け」や「伏線」による悲劇性の助長が変容を読み取りやすくしている。

以上のことから、夏の葬列にある「仕掛け」や「伏線」の結末に対する逆説的な作用や直接的な作用が物語の内容を複雑にしていると同時に、その作用が結末のどんでん返しへと収束するよう機能している。このどんでん返しによる悲劇は読み手を物語にひきつけ、読み手が物語を読み深めるための手がかりとなる。したがって、額縁部分の「彼が罪の意識をもつ」という変容に対して直接的ではないが、悲劇性を助長させ読み手に印象付ける物語中にある「仕掛け」や「伏線」は、変容を効果的に浮き彫りにしているといえる。

つぎに、夏の葬列の読み深めの内容を踏まえて清兵衛と瓢箪における変容を検討するにあたり、直接的に変容に関連する絵画の「きっかけ・原因」の描写とは別に、変容を浮き彫りにする描写の有無について考察する。

前額と後額の描写を比較したとき、後額は前額と違い清兵衛の性格に触れている。教員や父親によって瓢箪との縁を切られてしまうにもかかわらず、清兵衛は教員や父親を怨んでいない

とある。ここから、清兵衛は過去の出来事を引きづらず、流すことができる性格だとわかる。一方で絵画部分には、清兵衛が常に瓢箪について考え授業中でも磨いたこと、教員に瓢箪を取り上げられ父親に壊されること、清兵衛の瓢箪は六百円の価値があったこととある。これらのことから、清兵衛の常軌を逸した熱中の仕方や、多くの大人が気付かない瓢箪の真の価値を理解している清兵衛の素晴らしい審美眼が表現されている。清兵衛は素晴らしい審美眼とそれに相当した才能をもち瓢箪や絵に熱中するが、執着はしていない。これは生き物が大きく強くなるよう脱皮するように、熱中するものが変わるにつれ清兵衛もまた脱皮しているためである。清兵衛が教員や父親を怨んでいない理由は、瓢箪の代わりに絵を見つけたためである。したがって、脱皮するように清兵衛は瓢箪の頃よりも絵を描くことに夢中になり、持ち前の審美眼や才能によって大きく自身の技量をあげているといえる。現状に満足しているからこそ、過去にこだわらず父親や教員のことを水に流せているのだと考えられる。そのため、清兵衛は後額の一文のように父親に叱言を言われ絵との関係を切られたとしても、再び素晴らしい才能を活かし何かに熱中し、自身の技量や才能を磨き経験を増やし続ける。このことから、今後、清兵衛は大成していくと考察できる。したがって、「清兵衛と瓢箪」は、読み手が前額部分で感じていた熱中したものを取り上げられてしまう悲劇から、清兵衛が大成していくことを示した上昇の物語へと対照的な変容を起こしているといえる。

「世界一美しいぼくの村」では、絵画には直接的に変容へとつながる「きっかけ・原因」となる内容が描かれおり、前額がなくとも後額の内容のみからでも変容を推測しやすかった。しかし、「清兵衛と瓢箪」は前額と後額を比較しても変容を推測しづらい。比較から性格の描写の有無がわかったとしても、この清兵衛の性格は直接的に変容を示してはいない。しかし、絵画部分の清兵衛と瓢箪の出来事を加味することで清兵衛の物事を水に流せる性格が引き立ち、物語が悲劇から上昇の物語へと変容したのではないかと推測できた。したがって、両額構造よりも片側構造の方が読解の難易度が必ずしも難しいわけではないといえる。

中等教育で用いられる物語教材である「夏の葬列」や「清兵衛と瓢箪」より、額縁の「対照的な変容」や、絵画部分には変容に対する「きっかけ・原因」があるといった額縁構造のもつ特徴だけでなく、対照的な変容の明確化に対し効果的に機能する「仕掛け」や「伏線」などの描写の存在が中等教育の額縁構造をもつ物語教材の特徴と考えられる。こういった特徴を意識し生かすことにより、「やまなし」など額縁の情報量が少ない作品に対し新たな変容を検討し、解釈の余地を見出すことへ繋がる手立てとなるだろう。中等教育の額縁構造をもつ物語教材を用いた授業を行う際は、伏線や仕掛けなどの存在を踏まえながら、額縁構造の法則を活用して変容を読み取る過程を意識した授業である必要がある。したがって、初等教育で額縁構造を用いた教材を扱う場合は、「対照的な変容」や「きっかけ・原因」といった額縁構造の特徴、絵画から後額にかけての「謎解き」や「転調」といった特有のポイントを踏まえた作品読解の

力を児童に身に付けさせる授業構造を意識する必要がある。そして、十分にその力を身に付けた後に、中等教育では、額縁構造をもつ物語教材にある対照的な変容の明確化に対し効果的に機能する「仕掛け」や「伏線」など本研究で明らかになった特有のポイントに触れ、物語の解釈の余地を広げる読解を行う授業を構成していくという流れが重要と考える。

引用文献一覧

安藤修平（2015）『Ⅲ文学的な文章・詩の指導に役立つ用語解説』『小学校国語「読むこと」の授業を作る―文学的な文章編』高木まさき監修 光村図書 p.179

甲斐睦朗（1989）『「わらぐつの中の神様」の表現―キーワードに着目して―』『〔実践国語研究別冊 No.92〕文学教材の研究と授業⑨杉きみ子「わらぐつの中の神様」の教材研究と全授業記録』全国国語教育実践研究会 編 明治図書 pp.21-22

小林豊（2020）『世界一美しいぼくの村』『新しい国語　四下』秋田喜代美ほか一〇六名 東京書籍　pp.111-122

倉井伸太郎（2018）『額縁構造をもつ文学的教材の指導方法の開発に関する研究』上越教育大学国語研究／上越教育大学国語教育学会 編　pp.67-80

水野稚菜（2023）『小学校物語教材における額縁構造と後額の意味―「世界一美しいぼくの村」「桃花片」の分析を通して―』上越教育大学国語研究／上越教育大学国語教育学会 編 pp.43-53

西原千博（2002）「『夏の葬列』試解：国語科教材テクスト分析の試み」『北海道教育大学語学文学』第40号 pp.10-13

志賀直哉（2013）『清兵衛と瓢箪』『精選　国語総合』中洌正堯・岩﨑昇一ほか二一名 三省堂　pp82-90

須田寛子（2020）『物語教材における展開部の仕組みと終末部の落差に関する読解方法の研究：仕掛けと伏線が物語展開に与える影響』上越教育大学 pp.11-26

須貝千里（2001）『「二枚の青い幻燈」と「私の幻燈」の間で―「やまなし」の跳躍―』『文学の力×教材の力 小学校編6年』田中実・須貝千里 編 教育出版 p.28

山川方夫（2021）『夏の葬列』『伝え合う言葉　中学国語2』児玉忠・植山俊宏・丹藤博文ほか45名教育出版 pp.174-182

山本友美（2018）『中学校の文学教材における展開と伏線―「隠れた〈観念〉」としてのプロットに着目して―』『学芸国語教育研究36（0）』東京学芸大学国語科教育学研究室 pp.105-119